

# 社会運動を語る若者

## ——台湾ひまわり運動・香港雨傘運動を事例に——

日本大学 陳怡禎

本報告の目的は、現代の社会運動の担い手である若者はいかに、自分自身の日常的趣味を用いて社会運動について語り続けているか、さらにその語りを通して、社会運動に意味を付与・修正しながら、新しい「つながり」を構築しているかについて考察することである。

この新しい「つながり」を考察するため、2014年3月に台湾で起きた「ひまわり運動」、9月に香港で起きた「雨傘運動」の運動現場に注目し、その運動空間に行われる文化実践について考察する。なかでも、本報告するでは、特に女性によって行われた文化実践に焦点を絞る。具体的に、本研究は社会運動に参加している女性たちによる「運動リーダーのアイドル化」や「運動リーダーのカップリング・ゲーム」といった「女性専属の遊び」に着目し研究を進める。

本報告は、台湾・ひまわり運動への参加者八名や香港・雨傘運動への参加者五名、合計一三名のインフォーマントへのインタビューを通して、以下のような三点を明らかにした。①若者は、不特定多数の大衆に向けて社会運動を語ることを最重要視するのではなく、彼らはさらに熱心的に行なっていたのが、占拠された空間内部においての「内向的な語り」である。②「運動リーダーのアイドル化」や「運動リーダーのカップリング・ゲーム」は、いずれも運動参加者に「日本のサブカルチャー」として認識されている。ひまわり運動や雨傘運動に「日本」というコードが大いに取り入れられている理由として、台湾や香港の若者は「日本」と捉え、社会運動にも取り入れようとしている可能性が推測される。③社会運動に参加している女性たちは、社会運動内部やその外部である日常生活空間をより容易く往還するように、男性中心的運動空間の周縁に意識的に立っている。さらに、彼女たちは、受動的に社会運動のカリスマやリーダーに従来の社会運動参加者のように受動的に「カリスマ」に追随することではなく、能動的に運動リーダーを社会運動遊びの一部として楽しみ、社会運動を語る空間を作り出している。

女性達が「公」に属する男性主義的な社会運動空間に、「私」的趣味を持ち込み、「かわいい社会運動」を作り上げる事例について検討することにより、本研究は、「家族主義」や「家父長制」という特質がしばしば強調されている東アジア社会における女性達は、いかに政治や文化、そしてジェンダー意識という三つの側面に潜んでいる家父長制に対抗しようとしていることを分析した。